



こーひーぶれいく

ねぶたのある暮らし

小山内 暢

Osanai Minoru

夏の夕暮れ時、津軽一円では、ねぶたの周りに子どもたちが続々と集まってきます（“ねぶた”は“ねぶた”の誤植ではありません）。ねぶたは武者絵や美人画、ときには、おどろおどろしい幽霊画等が描かれた扇形や人形型の灯ろうのことで、大きいものは高さ10m近くに及びます。8月の月上旬頃、青森県の弘前市を核とした一帯地域でねぶたまつりが開かれ、「ヤーヤドー」といった掛け声、笛や太鼓によるお囃子の中、子どもたちが綱を引きねぶたを練り歩きます。ねぶたまつりは、青森市を中心とした“ねぶたまつり”に影を潜めている感もありますが、共通点が多く、兄弟のようなものとイメージしていただいて差し支えありません。

かくいう筆者は、ねぶた大好き人間で、（未熟な）ねぶた絵師をしております。雅号は「盛暢（せいちょう）」といいます。ねぶた絵師が画業を本職とすることは稀で、多くの場合、主たる仕事に就きながら、絵を描いています。筆者も大学教員をしながら、年に2台ほどのねぶた製作に携わっており、秋にはねぶた絵の展示会に出品するといった活動をしています。

今回は筆者のねぶた絵師歴を紹介したいと思います。自分史で、“ねぶた”が活字として最初に登場したのは、保育園の卒園アルバムです。将来の夢として、スポーツ選手やケーキ屋等が多く挙げられる中、筆者は「ねぶた絵師」を掲げており、当時から強く志していた記憶があります。当然、お絵かき帳はねぶた絵？（そのつもりでした）でいっぱいでした。かなり変わった幼少期を過ごしていたように思われるかもしれませんが、津軽地方には、ねぶたをこよなく愛する“ねぶたバカ”の子どもが多く存在



写真 今年度の製作の様子（2026年4月）

しており、筆者もそのひとりであったに過ぎません。小学生にもなれば、市内に点在するねぶた小屋を巡り、仮設小屋を覆うシートのすきまからねぶた製作の進捗をのぞき見ては心躍らせていたものです。小学校3年生には、文集の作文「ねぶたとぼく」の中で、絵師になることの決意を更に固くしていました。夏休みには、2mを優に超える小型ねぶたをクラスメイトと作り町内を練り歩いた年もありました。小学校高学年からは、同じくねぶた絵師を志していた同級生と2人で地元地区にある団体のねぶた製作に加わり、切磋琢磨しながら下積み時代を過ごしました。その間、当該団体に属する絵師に指導を受けたり、高校生の頃には、ベテランの絵師に師事したりしました。そして、念願が叶い、くたんの同級生と共に大型ねぶたデビューを果たしたのは大学4年生の夏でした。自らが描いたねぶたが、まつり本番で運行される様子を見て胸を熱くしたのを今でも鮮明に覚えています。育ててくれた団体のみなさまや師、絵師仲間をはじめ、身をなげうって製作を手伝ってくれる仲間達、支えてくれる家族、そして、書き入れときには、業務負担に気をかけてくれる職場の皆様がこの場を借りて感謝の意を表します（夏も仕事はこなしております！）。

ねぶた製作は深夜（～早朝）に及ぶこともあり、仕事や家庭とのバランスの取り方に悩むことも多々ありますが、生活にねぶたがある幸せ噛みしめながらこれからも続けていきたいと思います。

（弘前大学大学院保健学研究科放射線技術科学領域）